

Q&A

このコーナーでは、疾病や繁殖への質問、往診時には聞けなかったことや今更聞けないことなど、みなさんの疑問にNOSA I職員がお答えします。

今回は

厚岸町尾幌 匿名希望さんより

『いつもかけはしを楽しみにしています。ありがとうございます。ここでおねがいがあります！！春先より初産牛が体調をくずすと【ピロ】の検査をしましょうと言われてきましたが、この度【+】の結果となり、治療を受けることとなりました。増えているそうですね。是非、原因、症状、治療方法、また予防の仕方など、おばさんのかたい頭でもわかりやすく教えて頂きたいです。よろしくお願い致します。』

この問いに標茶家畜診療所の岡 由子獣医師が答えます！

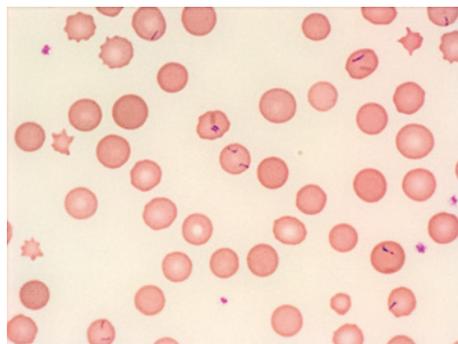
小型ピロプラズマ病について

この病気は日本では何十年も前からあるもので、昭和40～50年代に流行しました。年配の方には「ダニ熱」として経験があるかもしれません。最近、またあちこちの放牧場での発生がみられるようになった、古くて新しい病気です。

<原因>

小型ピロプラズマ病は血液に寄生する原虫（寄生虫）によって貧血を起こす病気です。日本ではタイレリア・オリエンタリスというピロプラズマ原虫が赤血球の中へ寄生します。通称【ピロ】と呼ばれます。

(写真1：血液塗抹写真 紫色に見えるのがピロ原虫です)



▲写真1 寄生された赤血球

<感染>

ピロが感染する経路はいくつか存在します。サシバエ・アブ・シラミなどの牛の血を吸う昆虫や、注射器の使いまわしでも感染します。また稀に親牛から子牛へ胎盤感染することもあります。しかし一番重要な感染経路は、放牧地での**マダニによる感染**です。マダニは一生のうち吸血と落下を3回繰り返します。ピロをもったマダニが牛を吸血することでマダニの唾液から牛に感染します。逆に、ピロを持った牛の血を吸うことでピロを持っていなかったマダニも感染します。ピロはマダニと牛の間をぐるぐると回っているのです。

(写真2：マダニ写真)



▲写真2 マダニ

<診断>

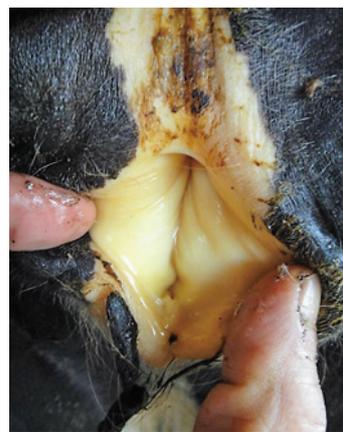
血液検査を行い貧血の有無を調べ、顕微鏡で赤血球に寄生するピロ原虫を確認します。

<症状>

主な症状は貧血と発熱です。貧血になると目や口、陰部の粘膜が白くなり、時間がたつと黄色くなったり（黄疸）します。また牛は貧血には比較的強いのですが、それでも血が足りないと色々な悪影響がでます。食欲の低下、乳量の減少などがおき、妊娠している牛では流産したり、時には重度の貧血で死亡することもあります。特に初めてピロに感染する初放牧牛で強い症状を示します。感染してい

でも症状を示さない牛も多くみられます。殆どの牛は一度感染すると一生ピロに感染したままの状態が続きます。そして重度に感染している場合や、分娩などのストレスがかかると突然発症します。ホルスタイン種と比べると和牛の方がピロに感染していても症状が出にくいようです。

(写真3：貧血牛の外陰部の粘膜蒼白と黄疸)



▲写真3 貧血した陰部

<治療>

治療には「ガナゼック」という薬がありますが、搾乳牛、妊娠末期の牛には投与できません。また、ピロを完全に殺すことはできません。貧血や発熱をしている牛には輸液などの対症療法を行います。重要なのは**予防、放牧地でのダニ対策**です。

<予防・対策>

①マダニ対策

マダニは越冬することができ、雪解け後、春になると活動が活発になります。殺ダニ剤(バイチコールなど)を定期的に牛にかけてマダニの吸血から守りましょう。耳標につけられる耳標型の殺ダニ剤もあります。殺ダニ剤による対策は効果が出るまで数シーズンもかかります。継続して行うことがとても重要です。殺ダニ剤の投与方法などはセンター・診療所の獣医師までご相談ください。

②放牧地の整備

牛のピロ原虫は牛にしか感染しませんが、牛のピロをもったマダニは、鹿など野生動物の体について移動し、別の放牧地に運ばれます。鹿などが入ってこられないようなフェンスで囲ってある牧野では小型ピロプラズマ病の発生が少なかったという報告もあります。

またマダニは牧柵周囲の雑草や笹藪、雑木林の下などの木陰などに好んで生息しているようです。マダニの好みそうな場所を少なくするのも効果的です。

<最後に>

小型ピロプラズマ病は牛を殺すことは少ないかもしれませんが、牧野の健康を脅かし、確実に生産性を低下させます。何より治療より予防が大切な疾病でもあります。ひとつずつ対策をし、感染を減らして行きましょう。